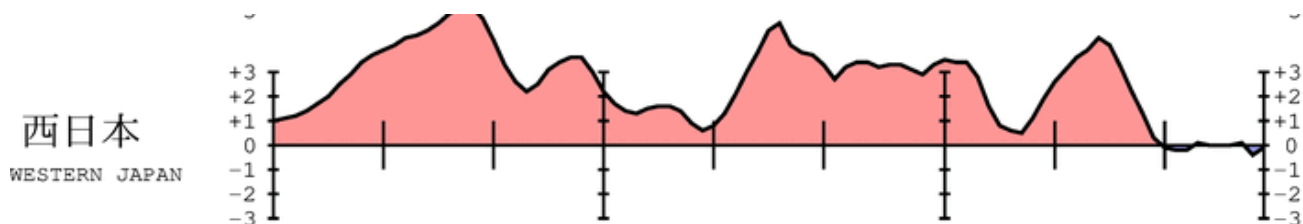
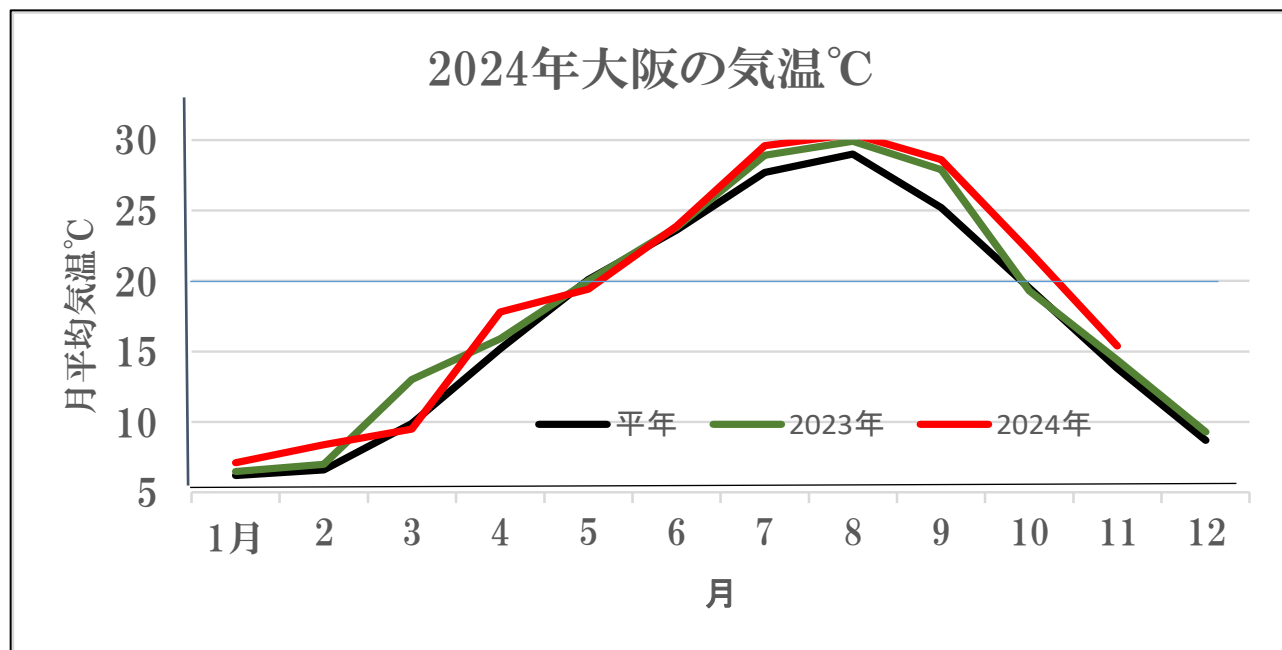


*本シリーズでは何時も書き始めの冒頭に気象庁の発表する、その時点での気象の経緯やその後の気象の予報を記載して来ています。言うまでもなく、樹木の生き様など自然界の営みはその期の気温の高低や降水量の多少で変化してくるからです。本報でも以前同様に、暑かった暦上の「秋」の気象の経緯と、最近発表された近畿地区のこの冬から初春（1～3月）にかけての気象の見通しから記述して行きます。

*今年の秋季？（9月～11月）の地域の気温の経緯。



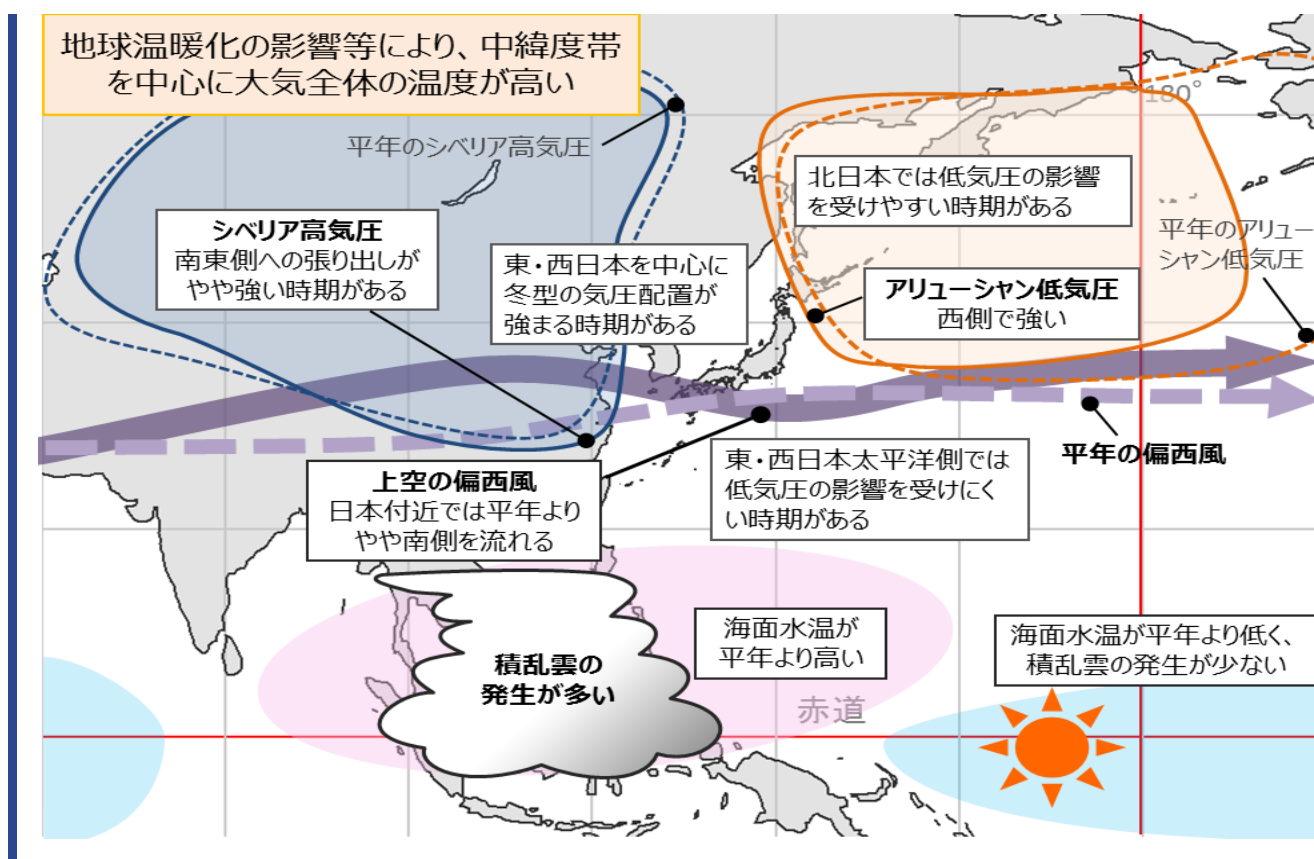
上図から近畿圏を含む西日本の気温も9月、10月が異常に高く、11月下旬になってやっと平常並みになったことがわかります。参考までに、大阪の今年の1月以降11月までの月平均気温の状況を平年、および昨年と比較して示しておきます。



20℃に青いラインを入れています、これはサザンカやツバキなどは日平均気温が20℃を下回らないと「花芽」を作らいと言われているので参考の為です。今年は、これ等の花芽形成が平年や昨年に比べて半月～20日ほど遅れたのではないのでしょうか？事実、数年前には見られたようなヤブツバキの12月開花などは全く見られず、この辺りではサザンカの開花も例年に比べると大幅に遅れ12月に入ってやっと散見されるようになりました。ツバキに至っては蕾み固しの状況です。

これまでの異常な気象の状況後、この冬はどの様になるのでしょうか。12月24日に気象庁は以下のように発表しています。（参考の為、同時発表された気象庁発表の解説図も添付しておきます。）

*予想される北半球の海洋と大気の特徴



*近畿地区の向こう3ヶ月間の気象予報（12月24日・大阪管区気象台の発表）

*上図の北半球の予想される海洋と大気の特徴から日本列島では・・・

- ・地球温暖化の影響等により、全球で大気全体の温度が高いでしょう。
 - ・ラニーニャ現象に近い状態となるため、太平洋熱帯域の海面水温は中部から東部では低い一方、西部で高い見込みです。このため、積乱雲の発生は日付変更線付近で少ない一方、インドネシアからフィリピン付近で多いでしょう。
 - ・これらの影響により、期間の前半は上空の偏西風が日本付近で南に蛇行しやすい見込みです。アリューシャン低気圧が西側で強い時期があり、シベリア高気圧は南東側への張り出しが強い時期があるでしょう。日本付近は冬型の気圧配置が強く寒気の影響を受けやすいでしょう。
 - ・期間の後半は偏西風が日本付近で平年の位置を流れやすいでしょう。アリューシャン低気圧やシベリア高気圧の張り出しが弱まり、日本付近は冬型の気圧配置が弱く寒気の影響を受けにくいでしょう。北日本では低気圧の影響を受けやすい時期があるでしょう。
- 一方、東・西日本太平洋側と沖縄・奄美では低気圧の影響を受けにくいでしょう

*参考：2024年12月（20日まで）の天候経過について

- ・冬型の気圧配置が続くことが多く、近畿日本海側では曇りの日が多く、雨や雪が降り、寒気の影響で大雨や荒れた天気となった日もあった一方、近畿太平洋側を中心に晴れた日が多くなりました。このため、近畿太平洋側の降水量は平年を大きく下回り、日照時間は平年を上回りました。近畿日本海側でも降水量

と降雪量は平年を下回り、日照時間は平年を上回りました。

・期間のはじめは寒気の影響を受けにくかった一方、その後は寒気の影響を受けやすかったため、気温は平年を下回った地点が多くなりました。

(実況)12/1～12/20	平均気温平年差	降水量平年比	日照時間平年比	降雪量平年比
近畿地方	-0.3℃	25%	121%	0%
近畿日本海側	-0.1℃	71%	123%	0%
近畿太平洋側	-0.3℃	8%	120%	

*向こう3ヶ月の気象予報 月別

・1月：冬型の気圧配置が強まる時期があるため、近畿日本海側では、平年に比べ曇りや雪または雨の日が多いでしょう。近畿太平洋側では、低気圧の影響を受けにくいため、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。気温は平年並みかやや低い（低40、並40、高20%、降水量 少40、並40、高20%）

・2月：近畿日本海側では、平年と同様に曇りや雪または雨の日が多いでしょう。近畿太平洋側では、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。（低30、並40、高30 降水量 少40、並30、多30）

・3月近畿日本海側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。近畿太平洋側では、天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。（低20、並30、高50 降水量 少40、並30、多30）

*以上から、来期のサクラの開花は平年より早くなると予報される。

*気象のお話しはこれくらいで、本報では先日の自然と文化科の「科内研修会」での発表の内容について、時間の制約上、詳述できなかった部分を補足的に記述しておきたいと思います。

まず、今年の気象異常で生じた「樹木などの生き様の変化」について本報では補足しておきます。

スライドでは

*「今年の夏季～秋季の気象で樹木等に生じた異常な現象・変化」として

1. 夏季のサクラ・ソメイヨシノの黄葉・落葉現象
2. 二次展葉・・・ここ2、3年は普通に見られ、一部で三次展葉も・・・
3. 秋期の花の開花遅れ・（蕾の生成遅れ？）9月以降の気温・・・高
4. 一部の果実で不作に・・・9月初旬の少雨・・・落果多し。
5. 二次展葉に伴う春咲きの花の秋期の開花
6. 熱帯・亜熱帯性植物の拡大 野生化が進む
7. 動物相
 - ・クマ・シカの増加・・・人里への進出が増えた（温暖化）
 - ・海水温の上昇…サンゴの死滅、漁業への影響（温暖化）
 - ・蝶・蛾・トンボ等の減少・・・野鳥の減少因？
 - ・カメムシ類の異常発生（果樹）、クビアカツヤカミキリの被害
 - ツヤアオカメムシ（越冬）、クサアオカメムシ（夏）

の7項目を上げましたが、7.は新聞やTVのニュースでご承知のことと思いますので略し、1～6の項目について私の観察事実と考察を記述しておきます。

1. サクラ（ソメイヨシノ等）の黄葉・落葉現象

夏季のサクラの黄葉現象は2, 3年前に気づき皆様にもお伝えしたと思います。過ってソメイヨシノの紅葉は数年前までは、他の樹木より早く9月末ごろから枝先から紅葉し、紅葉すると枝に留まることはなく上方から順次落葉し、10月末ごろには枝が裸になるのが普通でした。それが、昨今では8月は勿論、9月の気温も高くなることが多い為か、紅葉始める時期も遅くなって来ています。今年などは11月初旬から紅葉が始まり、11月中旬（16日）でも右のような状態でした。



この紅葉とは別に、8月中旬ごろから日陰となる下方の枝から紅葉せず、黄葉して落葉する現象が見られるようになりました。今年はこの種の落葉が昨年、一昨年よりかなり多いと感じました。8, 9月の降水量（少雨）に関係しているように思われます。日陰の葉は光合成への関与が低い故に水不足への対策としてクロロフィルを分解、養分を回収、黄葉となってリストラされているのではないのでしょうか。

2. 二次展葉・三次展葉

元々、樹木は強い刈込などされると、下方の芽や潜伏芽からシュートを伸ばす能力を持っています。刈込が無くても一斉開葉型の樹が新しいシュートをほぼ一斉に伸ばす現象を二次展葉、三次展葉と仮称しています。この場合は明らかにその年につくられた「芽」からの展開のようです。アラカシやシラカシなどではこの現象は果実（堅果）をつけたシュートでは発生しません。（ただし、クスノキでは果実を付けた枝先からの展葉が見られます）さらにこのような展葉が見られるのは常緑樹に多く落葉広葉樹では低木は別として高木ではモミジ類やナンキンハゼ等数種に限られます。

・ご存じのことでしょうが、元々クスノキやシイの樹は、南方系で台湾や沖縄など南西諸島でも普通に見られる樹種です。一方カエデ類や桜のような落葉樹は北方系です。よく大木の樹種について「西の大クス、関東平野の大ケヤキ」などと言われて来たのはこのことを代表しているように思います。

・これも良くご存じのことでしょうが、常緑樹の葉は厚く、小型、表面にクチクラ層を持ちます。落葉樹では殆どの樹種の葉は薄く前者よりは大きくクチクラ層がありません。春から初夏にかけては落葉樹の方が光合成には圧倒的に有利なのでしょう。一方、夏季のような気温が高く、日照が強くなった場合はどうでしょう。真夏のサクラの葉とアラカシやクスの葉の様子を比較して見ると、前者は葉の表面を内側にして裏面が外側に出るようにそります。また下方にぶら下がったような姿をみせます。一方アラカシ・ツバキなどはその逆で葉は裏面が収縮したようにそります。この差にはどんな意味・生き様の差があるのでしょうか？

前者では、当然陽光の当たる面積が小さくなり、一方で裏面の気孔が開きやすくなり蒸散作用には有利に働きます。蒸散によって葉温を下げ、葉の寿命を保っているのでしょう。一方常緑樹系ではこの逆で気孔が閉じやすくなるはずで、気孔を閉じて葉の水分を保持する方向に働くと考えられます。南方系ですので暑さには強く、クチクラ層の陽光反射もあって蒸散による葉温調節には落葉樹系ほどエネルギーは不要でしょう。落葉樹系では気孔は開くものの水の蒸散の為、炭酸ガスの取り込みは阻害され光合成の能力は低下するでしょう。これでは、二次展葉するほどの養分も合成出来ないでしょう。一方、常緑系では

真昼はともかく朝夕の比較的気温の低い時間帯では光合成も可能。果実の成熟や二次展葉の養分合成も多くなると思われます。



・落葉樹で例外的なのは、柿、ナンキンハゼ、それにハゼノキ等ウルシ科の樹木。これ等の葉は落葉樹並みに厚い葉をもちます。夏季の葉の様子も常緑樹と同じ、果実の成熟は秋季であり暑い夏季とは言え光合成は欠かせないのでしょう。

・上方に 11 月に入って異常展葉したハナミズキ（左）と三次展葉と思われるシラカシの画像を掲載しておきます。これ等は今年初めて見られた異常展葉です。何れも一斉開葉方式での展葉でした。



3. 秋期の花の開花遅れ・（ 蕾の生成遅れ？）

・気象庁の生物季節観測の対象種であるススキの開花については、気象庁は大阪では 10 月 4 日、（平年より 26 日遅い）、さらに神戸では 10 月 18 日（平年より 22 日遅れ）と発表しています。

・本報では秋の定番であるキンモクセイ、関連してヒイラギ等の開花、Sさんから頂いたマルバノキ（別名はベニマンサク）の開花情報について記述しておきます。

3-1. キンモクセイ、

＊以前は 9 月末に実施していた箕面公園の公開観察会の時でも開花が見られることがあったように、本種の開花時期は 9 月中旬～10 月下旬と図鑑などには記載されています。本種は気温の影響を受け、気温が高いほど開花時期は遅くなることは知っていました。以前の箕面の 9 月の公開観察会時でも街中と滝道の上流方向との開花状況の差などから納得していました。

＊また、最近の文献などには 9 月にいったん花が咲き終えた後、10 月に新しい花が開花して下旬まで楽しむことができる二度咲きする樹もあると記載されているものもあります。

ご存じのように、本種はジンチョウゲ、クチナシとともに日本の三大香木とされており、花が見えずと

も漂ってくる香で開花を知ることが出来ます。私の近所では 10 月 17 日に数か所でほのかな香を感じましたが、殆どの樹では葉腋に球状のもの（蕾）が見られる程度でした。ところが 10 月 30 日（昨年の一斉開花は 10 月 23 日）にこれ等の樹が写真のように一斉開花、あちこちで強い香りと花を見ることが出来ました。確かに 2 度咲きの樹もあるようです。気付いたのは今年が初めてのことです。このような 2 度咲きは秋季の気温・温暖化と関係あるのでしょうか。

本種の 2 度咲きについて検索してみたところウエザオニュース社から下記の調査結果が発表されていることを知りましたので転記しておきます。何時から 2 度咲きが見られるようになったか・・・

関東周辺では今年で二度目との回答が多く、西日本や東海エリアでは今年初めてとの回答のほうが多い結果となりました。とのこと

	今年初めて	今年 2 回目
東京都	8%	45%
愛知県	47%	17%
大阪府	50%	16%
広島県	37%	2%
愛媛県	51%	14%
福岡県	24%	33%
鹿児島県	40%	17%

どうやら 2 度咲きが見られるようになったのは最近のようです。やはり、秋季の気温の上昇と関係ありそうです。皆様の附近では如何だったのでしょうか。

3-2. ウスギモクセイ

キンモクセイは雄樹だけが移入され結実稀とされていますが、ウスギモクセイは結実するとされています。一昨年に日ごろの散策路で、結実をみたことを書きましたが昨年は結実が見られませんでした。今年は如何にと、キンモクセイの開花時に見に行ったところ時を同じくして右の花が見られました。



黄色というよりは白色に近く、明らかにキンモクセイとは異なります。この樹を 12 月中旬に見たところ今年には結実が見られました。ただ、附近には同種の樹はありません。種としては極近縁なので、キンモクセイの花粉でも結実可能なのでしょうか。

3-3. ヒイラギ

同じモクセイ科のヒイラギの開花はこの附近では 12 月 4 日でした。これも、あちこちの庭や生垣で一斉に開花です。本種



は漢字では木編に冬と書くのでこの時期の開花は異常ではないのかも知れませんが、普通は11月中に咲いていたのではないかと思います。やはり、この秋の気温の高かったことの影響を受けたのではないのでしょうか？

3-4. マルバノキ

ご存じの通り、本種はモクセイ科ではなく別名でベニマンサクと称されるように、マンサク科の仲間です。



Sさんからは京都植物園で撮影された

3枚の写真と次のようなご質問が寄せられました「冬芽とは簡単、単純に言うと冬に休眠する芽とおっしゃっています。ユリノキは順次開葉という言葉がありますが・。マルバノキの様な開花と冬芽の関係でそのような言葉はあるのでしょうか？

今回お尋ねはマルバノキの冬芽です。左の写真は11月17日に写した物でその時は冬芽だと思っていましたがその後、1週間もたたず開花したようです。記憶をたどると以前は何時も11月の中頃には開花していました。それで冬芽は？と調べたら真ん中にある写真から枝先の鱗芽である事が解りました。マルバノキについて宜しくお願いします。」(原文借用、ユリノキの展開の様子等略させて頂きました。)

*まず「冬芽」の定義は私なりに、「春先の葉の展開時、葉腋に芽または芽の原基を持ち、夏季の終わりには「芽」の形を完成、葉から送り込まれたアブシジン酸によって一定の低温期を経ないと展開しない「芽」のこと」。一方夏季の終わりや秋季に「芽」を形成、通常は年越しして展開や展葉する芽を越年芽として区別しています。分かり易い例では、「ウメ」や「蠟梅」などの花芽が挙げられると思います。これ等の花芽は条件さえ良ければ初冬、年内にも開花することさえあります。通常これ等の開花は1~2月です。ではこれ等の葉芽は？「冬芽」と言えるのでしょうか？図鑑などでは「冬芽」としては掲載されていません。ボケ、蠟梅などもそうですね。これ等を越年芽としています。また、順次展開のユリノキなども寒さの為、展開を止めただけ、2枚の托葉に囲まれてあたかも「芽」のような姿で越冬する為、「冬芽」扱いとなっています。これを「芽」とするなら越年芽とした方が良いでしょう。

一方、ご質問のあったマルバノキは図鑑では開花が10~11月 頂芽は「冬芽」として掲載されています。同族のマンサクは花芽も葉芽も「冬芽」扱いです。不思議なのは、マンサクは暖冬・冬季の気温が高いほど早く開花します。一方でマルバノキの花は気温が高いほど遅く咲くようです。Sさんの記載されたように通常は京都では11月中頃に咲いているとのこと。高等科時代の神戸森林公園観察会では11月初旬に開花が見られていたとの記憶がありますし、一方、私の附近での今年の開花は12月10日でした。前述のキンモクセイ同様 涼しさを感じないと花芽を作らず開花しない種であると思われます。少し疑問は残りますが・・頂芽(鱗芽)は冬芽としておきましょう。この種の樹木の開花・開葉方式に特別な用語は無いように思います。

4. 一部の果実で不作に・・・9月初旬の少雨・・・落果多し。

本件に関しては8月末から続いた下記の近畿圏の気象状況に起因していると考えます。

(実況) 09/01～09/20	平均気温平年差	降水量平年比	日照時間平年比
近畿地方	+3.8℃	29%	156%
近畿日本海側	+4.5℃	22%	164%
近畿太平洋側	+3.5℃	32%	153%

気温は高い、降水量は平年の3分の1以下、さらに日照時間は平年の1.5倍これでは果実を成熟させるどころか自身が生き延びる手段を取らざるを得なかったのでしょうか。特に多量の揚水を必要とするツル性植物にとっては災難だったのでしょうか。例年9月末～10月初旬に実施している専科の武田尾での授業、例年10個や20個のアケビの果実が見られ、講座生の方に味わってもらっていたのですが、今年は1個も見当たりませんでした。状況はホームグラウンドである甲山森林公園でも同じでした。公園外でやっと1個を見つけ、公開のファミリー観察会に展示出来ました。



5. 二次展葉に伴う 春咲きの花の秋期の開花

常緑樹では、二次展葉してもシュートが伸びるだけですが、落葉樹系では二次展葉でシュートの伸長に伴って春咲きの花の開花が多く見られました。その例を下記に列記しておきます。皆様の地域では如何だったでしょうか。

＊カイコウズ (アメリカデイゴ)・・・

＊シマトネリコ・・・結実も見られた

＊ヤマブキ、八重ヤマブキ、白ヤマブキ

＊トキワマンサク、ベニバナトキワマンサク

＊キンシバイ 12月まで咲く

＊シモツケ 8月～11月

＊ベニゴウガン 12月に開花 (右)

(・他に春・秋季に開花したものもありましたが、園芸種では四季咲き、春・秋の2期咲きなどあり、不明な種は略しました。)

以上のような返り咲きは、これまでも起こっていたかも知れませんが今年は特に多かったように思います。

＊今年の9月に、神戸でサクラが開花したとのニュースが報道されました。秋季のサクラの開花などさして珍しい出来事ではなく、夏季に葉がなくなったシュートでは花芽が「休眠」状態とはならず、秋季に開花する現象



は何度も経験しています。ニュースと共に掲載された写真も葉の落ちた枝先の開花でした。

＊では、前頁右下のソメイヨシノのシュートの映像は如何でしょう。12月10日に撮影したもので、残念ながら開花の姿は見ることは出来ませんでした。このシュートをよく見てください。左上方の枝には今年出来た花芽はそのまま残り、展開したのは頂芽である葉芽。この葉芽から伸びたシュートの葉腋にできた花芽が展開し開花したとしか考えられません。この樹の別の場所から採取した短枝（的な枝）の様子が右上の写真です。

今年出来た花芽は動いていません。展開したのは頂芽である「葉芽」であることは明かです。勿論、このような現象は今年の異常な気象がもたらした、しかも極めて稀な現象でしょう。なお、葉芽の展葉の様子も面白いですね。お気づきのように大きな鋸歯の葉は托葉、丸味を帯びたのが本葉です。

ついでながら、この樹の12月初めの映像を紹介して



おきます。背景の桜の樹は殆んど葉が散り落ちています。この枝には青々した葉がついています。二次展葉？したとしか考えられません。葉の付き方から長枝の葉芽の展開の様に思われますが、右上部には「花」の残骸である花柄が、また下方の枝の中頃では「托葉」が見られます。（写真を拡大して確認下さい。）



なお、花は見られませんでした。残骸の萼の映像も添付しておきます。通常の開花時「萼」はこんな形なのではないでしょうか、少し見にくいかもしれませんが萼の上にはオシベらしきものも見られます。

珍事の紹介は、これまでといたしますが・・・実は「花芽」が冬眠から覚めない（展開しない）のに「葉芽」は展開する現象は過去の「花芽が休眠打破」されているか否かを見る方法として提唱した「加温テスト法」でも見られていました。このテストについては20℃X20日～30日程度で花芽の様子は分かるので試験は打ち切っていましたが・・・一方で、30日程度加温しても休眠打破されていない花芽は展開しないが、葉芽が展開する現象も見られました。その時は、花芽に比べ葉芽の方が「休眠打破」後の加温時間が400℃・Dayより多く600℃・Day程度は必要なのかな？程度に思っていました。今回のような珍事を見るとそうとは言えないように思います。むしろ、花芽は「休眠芽（冬芽）」であるが、「葉芽」

は越年芽と見た方が良いでしょう。

ソメイヨシノではありませんが奄美・沖縄の基準ザクラである「ヒカンザクラ」は最近、南方の宮古島や石垣島では、開花はするが満開（80%開花）には至らない年が出て来ています。でも翌年は満開を記録されることもあります。また、何期かは定かではありませんが高等科の修学旅行で石垣島へ行きましたが、開花日は1月末と発表されており、旅行はその2週間後だったのですが満開どころかちらほら咲き。結局この年には満開は記録されませんでした。でも翌年は満開日も記録されています。花芽は開かなくとも、葉芽は展開する・・・花芽は冬芽、葉芽は越年芽の例ではないでしょうか。

＊前出の「マルバノキ」の開花は気温の低いほど早く咲き、葉芽の展開は春先、よって葉芽は「冬芽」？と単純に考えて良いかです。科学的には「休眠状態」にアブシジン酸が関与しているか否か、加温することで芽が開くかどうかで区別されるべきと思いますが・・・。冬季に「芽」の状態を観察できれば「冬芽」と見るもあり得るかなです。なお、常緑樹の「芽」には春にならないと展開しないものが多いが「冬芽」の図鑑などには掲載されませんね。

通常2月から始めていた「加温テスト」の時期を早めやってやってみようかなと思っています。これで、本当の「休眠芽（冬芽）」か否かが区別できるかも知れません。詳細は後述します。



6. 熱帯・亜熱帯性植物の拡大 野生化が進む

今回の発表で取り上げたのはランタナ、アメリカノウゼンカズラ、ノアサガオなど熱帯・亜熱帯性植物の3種でした。何れも、園芸種として家庭の庭など作られていたものが、逸出し野生化・拡散して来ている種です。

6-1. ランタナ

ランタナ (*Lantana camara*) はクマツヅラ科の常緑小低木。中南米が原産。小花からなる散形花序をつける。開花後、時間がたつと次第に花色が変わるため、同一花序でも外側と内側では花色が異なります。(内側：黄色外側：紅色。和名ヒチヘンゲの由来)。大きさはやや匍匐性で最大1mほどの株をつくる。花期が長いことと果実を多くつけ、この果実を鳥が食べ種子を散布するので拡散しやすい。茎は断面が四角で細かい逆棘があるため扱いにくい。

・本種は世界の侵略的外来種ワースト100に選定されています。特に熱帯～亜熱帯気候の土地では、よほどきちんと管理しないとそこかしこにこぼれた種が増えてしまい、そうした気候の土地では「植えてはいけない花」と言われることさえあります。日本では観賞用に栽培されていたが、温暖化の影響で逸出し、空き地は勿論、生垣やご家庭の庭などにも広く拡散して来ています。日本では外来生物法で要注意生物に指定されています。



6-2. アメリカノウゼンカズラ類

ノウゼンカズラといえば中国大陸原産で、広

い鐘形で明るいオレンジ色の花の印象が強いと思いますが、本種は北アメリカ大陸東部を原産とする同属のつる性落葉樹です。花冠は紅色が強く、中国原産のノウゼンカズラよりも細長いトランペット形をしています。花序がコンパクトにまとまり、萼筒が花冠と同様の橙赤色に色づくことも特徴です。中国原産のノウゼンカズラの結実は極めて稀ですが、本種は時おり結実する様子が観察できます。葉や茎に有毒成分パコールを含み、汁液が皮膚に付着すると炎症をおこすことがあります。なお、本種はノウゼンカズラ属ですが最近見かける機会の増えた**ピンクノウゼンカズラ**は、別属の *Podranea* 属に分類されるということです。最近は花色の違う園芸品種も多く出回っているようです。

*写真に掲載したのは、市内山手の斜面のものです。住まいの近くの芦屋の私有地の金網のフェンスに絡まっていたアメリカノウゼンカズラは、フェンスに横方向に広がっただけでなく、空き地に進出、地表を覆い、また排水溝をつたって 5m ほどの道路をくぐりぬけ、向かいのご家庭の塀にのぼる姿が見られました。今年の秋季の気温が高かったことが拡大を促したのでしょう。ノウゼンカズラ類は「庭には植えてはいけない」樹木との記載もあります。T さん？から「駆除」に苦労されたと聞いたように思います。

6-3. ノアサガオ

本種を見たのは、おそらく 10 年以上前の高等科の修学旅行で奄美大島を訪れた際に、樹木にからんで冬季にも拘らず鮮やかな大輪の「アサガオ」のような花をつけた蔦性の植物を見て、**ノアサガオ**の名と亜熱帯性植物であることを知りました。その後、この近辺でも数ヶ所のご家庭で通常のアサガオとは違い多くの花をつけ秋まで咲く蔓性種が植えられていることは知っていました。ただ、花も 9 月終わりごろには見られなくなり、通常の朝顔の改良種であろうと思っていました。ところが、今年は 10 月末でも右のような花が見られ、例によって「レンズ」で検索し、**ノアサガオ**であることを知りました。文献では・・・

「**ノアサガオ**は熱帯から亜熱帯地域に自生するつる性の多年草で、沖縄では海岸付近に旺盛に繁茂しています。一年草のアサガオと比べて格段に強健で、10 数 m もつるを伸ばします。開花期間は長く、霜が降りる 11 月まで咲き続け、10 月上旬ごろに花数が最も多く、3~8 個の花を房状につけ、しかも夕方まで咲き続けるので、豪華です。繁殖力もきわめておう盛で、地表面付近からランナーを出し、広がっていきます。」・・・などの記述もありました。

その後、あまり普段は散策のルートには使っていない、住まいである大谷町内で 2 ヲ所の野生化が確認できました。右は 11 月中旬、町内の公民館のフェンスに、クズ、アメリカノウゼンカズラと競合し生垣を作っているノアサガオの姿です。町内のもう 1 ヲ所は近くの広場で横向きに地表に広がるだけでなく植栽されているアラカシに取りつき、7, 8 m の高さまで登っての開花する姿がみられました。これも今



年の秋季の気温が高かったことに関係していると思われます。

＊なお、樹木ではありませんが、**草本系**ではオキザリス系の拡大。カタバミ、イモカタバミ、園芸種のハナカタバミなどの開花、オオキバナカタバミがかなり成長し広がった姿を見せています。特にオオキバナカタバミはこの春と同様、幹線道路横の市民管理の花壇では水仙の植えられた 1 画を完全に占拠しており、多分今年同様ここでは来春に水仙の花は見られないでしょう。

・余談ですが大阪・神戸の年平均気温は平年で 17.0℃、昨年度は 18.0℃で観測史上 1 位、今年は 18.4℃の予想。この気温は過っての鹿児島以上。植物相を見る限りこの附近も既に亜熱帯域入りのように感じる。

7. 黄葉・紅葉

7-1. ハナミズキ・モミジバフウ

この 2 種はご存じの通り、気温に影響されることなく日長時間(正確には暗期時間)で紅葉するようで、今年も猛暑下でも 10 月下旬には紅葉が見られました。勿論、これ等 2 種でも品種によってはこの時期には紅葉しない樹もあります。(モミジバフウでは紅葉しない品種の方が多いように思います。) 万博公園の学習館裏のモミジバフウが毎年、11 月初旬のイベント時には紅葉し、落ち葉が拾えたように思います。また、私の附近では山手幹線沿いの街路樹も今年も 10 月下旬に紅葉が見られました。

7-2. イチョウの黄葉、モミジ (イロハモミジ) の紅葉

ご存じの通り、この 2 種については気象庁の生物季節観測の種に指定されており、黄(紅)葉日と落葉日が観測され、公表されてきています。参考までに今年の記録と平年比と共にお知らせしておきます。

*イチョウ	黄葉日	(平年比)	落葉日	(平年比)
大阪	11月27日	(5日遅い)	12月9日	(5日遅い)
神戸	11月21日	(8日遅い)	11月29日	(5日遅い)
京都	12月2日	(8日遅い)	12月19日	(15日遅い)
*イロハモミジ	紅葉日	(平年比)	落葉日	(平年比)
大阪	12月10日	(9日遅い)	12月24日	(11日遅い)
神戸	12月2日	(1日遅い)	12月23日	(7日遅い)
京都	12月20日	(15日遅い)	12月24日	(11日遅い)

11 月 22 日近くの西宮北山緑化植物園にモミジ狩りに出かけました。園内の北山山荘ではオオモミジの紅葉が見ごろ、園内ではイロハモミジはまだ紅葉中半でしたが、オオモミジとスズランノキなどは見頃でした。



前頁の写真は、左が北山山荘・日本庭園のオオモミジで一斉に紅葉し、丁度見頃。右は園内の一隅、左側はケヤキ、黄葉はイロハモミジ、手前の紅葉はオオモミジ、右の濃い紅色はスズランノキの紅葉です。通常スズランノキの紅葉はモミジ系より早く、散り初めとはなっていました。紅葉が見られラッキーでした。

・一方 12 月 12 日に開催した、甲山森林公園の MNC の定例の観察会では、モミジ系は殆んど散り落ち、ヤマザクラ・ハゼノキの紅葉と甲山全山を覆うハハソモミジが見頃でした。山のモミジの紅葉の期間は短い様です。と言うよりは「今年は秋が短かった」でしょうか。

・私の住居近くではまだ紅い葉を残したモミジ（園芸種？）が多く見られますし、マンションの日陰などではイロハモミジの赤・黄・緑の三段モミジさえ見られます。今年の紅葉の遅れは明らかですね。

8. 加温テストの開始、

前述の 3－4 項、5 項の疑念を試してみようと早速、右のように、居室内で 12 月 25 日より加温テストを始めました。以前は花瓶を使っていたのですが、今回は広口瓶の登場です。欲張って観察種を多くしたこともあります。過去に枝の切断面が水面上になり、芽が乾燥・枯れ落ちるなど苦い経験があるからです。ガラス瓶であれば水面や、枝の切断面の様子も見られるからです。

写真では欲張って多く生け込んでいるので分かり難いかも知れませんが、以下の 6 種 7 本です。

- *ソメイヨシノ・・・通常の花芽・葉芽のある枝
- *同上の長枝・・・葉芽のみあり
- *マンサク・・・花芽と葉芽
- *ロウバイ・・・蕾と小さな葉芽
- *コナラ・・・鱗芽
- *アベマキ・・・鱗芽（冬期も成長？・・・笹井氏）
- *アカメガシワ・・・頂芽（裸芽）



勿論今回テストに使っている枝の個々についてテスト前の写真は撮っていますが、略します。結果が出るのは蠟梅やマンサクの開花は別にして展葉などは 1 ヶ月以上後になると思います。気が向いたら纏めたいと思っています。

*無計画に書き流して来たら 13 ページに、相変わらずの取り止めない乱文の羅列で恐縮です。本年の「花だより」はこれで終わらせて頂きます。

何時ものことながら、疑問やご意見、情報などおありでしたら一報下さい。

末筆ながら、本年も取り留めもない乱文にお付き合いありがとうございました。

どうか良いお年をお迎え下さい。

以上